

# 「1人1台端末」の時代を踏まえた学びの仕組みづくり（要旨）

学校構想サブプログラム 21AE051

平松 美誠

【指導教員】 野村 泰朗 船橋 一男

【キーワード】 1人1台端末 ICT活用 GIGAスクール構想 情報教育 校内研修

## 1. 研究の背景

小学校学習指導要領（文科省 2017）では、これからの予測困難な時代を生き抜くために不可欠な「情報活用能力」が学習の基盤となる資質・能力として位置づけられた。それを、GIGAスクール構想（文科省 令和元年 12月）によって、学校のデジタル環境整備が進め、令和2年度には小中学校に1人1台端末を配布することで支えしようとしている。しかし、デジタル庁による調査（2021）によると、多くの教員が、この新しい資質能力を育成すること、そしてそのための新しい学習環境への移行において、児童生徒および教員自身のICTリテラシー不足、教員研修の必要性、仕事量の偏りを課題としている。

## 2. 研究の目的と方法

本研究では、これらの現場教員の課題を次の2つの側面から解決することを目指す。

- (1) 児童及び教員のICTリテラシーの向上を図るために、日常的に1人1台端末を活用する場を学年ごとに設定することで習慣化させる指導法を提案する。
- (2) 学校及び教員のICT活用に対する意識改革と指導力向上を図るために、1人1台端末を活用した授業づくりや活用を進めていく上で生じた問題点を共有するための教員研修の充実方法を提案する。

各提案の有効性を実地研究校の協力のもと、2021年9月～2022年1月まで次のように教育臨床的に研究を進めた。

- (ア) 1人1台端末の活用を日常化するための仕掛け、仕組みを提案し、実践してもらうことで、児童のICTリテラシーが高まる見取。具体的には、授業中端末を使用することに制限を設けないこと、毎日持ち帰り、家で使わせるための具体的な手立て等を提案した。
- (イ) 校内研修としてICT活用指導力と情報活用能力との違いや関係を意識し整理させる、この両者を組み合わせた具体的な授業作りの方法、情報を共有する「ミニ研修会」の提案を行った。
- (ウ) 質問紙により教員の持っている「1人1台端末」「ICT活用指導力」に対するイメージの変容を調査する。

## 3. 結果と考察、今後の課題

### 3.1 指導法の効果～教員のICTリテラシーの向上

児童のICTリテラシーを向上させるために教員が1人1台端末を日常的に活用する環境を整えることができたかを検証する。具体的には①Microsoft Teamsの活用回数及び活用内容の変化、②教員への1人1台端末の活用に関する質問紙調査の2つで検証した。

・Teamsの活用回数は、2021年11月末に実施した（イ）の研修後は、1学期と比較して増加した。中高学年において、日常生活でTeamsを活用する環境を整え、実践した結果といえる。また、担任が出張先からTeamsで連絡するなど提案した内容から発展した活用法も見られた。

・1、2学期の教員への1人1台端末に関する質問紙調査の結果を比較すると、使用頻度は増加していたが、主に低学年

担当教員から自分自身の操作スキルを不安視する記述が残っていた。

以上のことから、日常生活で活用する環境を整えることは教員のICTリテラシーを高めるために有効であったと示唆される。しかし、発達段階からどうしても絶対的な活用頻度が少なくなる低学年の担任の回答結果からわかるように、教員全体のICTリテラシーを高めるためには、日常での習慣化だけでなく、校務への積極的導入など学校全体での取り組み、さらに定期的な校内研修の必要性が示唆された。

### 3.2 ICT活用に対する意識改革と指導力向上

(イ)の校内研修終了後、内容についての理解度、納得度を調査したところ、次のような結果が得られた。

- ・1人1台端末を日常生活で活用することの必要性に対する納得度は高かった。また、提案した「ミニ研修会」についても、肯定的な意見が多かった。
- ・研修に参加した教員が「情報活用能力を育成するための授業（情報教育）」と、「授業の情報化（効率化）」の違いを理解することができた。
- ・「ICTを使うこと自体が目的化してしまっていた」と記述した教員も、「授業の情報化を図るために活用したい」「単元内自由進度学習に取り組んでみたい」とICTを手段として捉えることができていた。

以上のことから、教員の1人1台端末に関する意識改革はある程度進めることができたと考えられる。

### 3.3 研究の成果と課題～児童のICTリテラシーの向上

児童のICTリテラシーの変容を3.1①に加えて③授業中における1人1台端末活用のパフォーマンステスト④児童への1人1台端末の活用に関する質問紙調査の3つで検証した。

- ・日常生活において、児童がTeamsを主体的に活用する場面が多く見られた4年生と他学年を比較すると、授業外で活用するチャンネル数が9個で他学年が最大でも3個に対して顕著に多かった。
- ・パフォーマンステストで、児童の操作スキルを確認したところ、日常的に使っているツールの技能が定着していた。また、1、2学期の児童への質問紙調査の結果を比較すると活用できるツールが増えたことがわかった。

以上のことから、児童のICTリテラシーを高めるためには、(a)技能訓練のために強制的に使用する枠組み、(b)担任管理の下での自由度を高めた端末活用機会、の必要性が示唆された。

今後の課題として、(i)「ミニ研修会」の内容の開発と継続の実施の方法、(ii)児童のICTリテラシーを高める授業づくりの開発とその研修方法、(iii)AI時代の新しい授業観・教育観について研究を進めていきたい。

## 4. 参考文献

- ・文部科学省(2017):「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編」
- ・デジタル庁(2021):「GIGAスクール構想に関する教育関係者へのアンケートの結果及び今後の方向性について」